



日本植物分類学会 ニュースレター

No. 56

Feb. 2015

今号のトピックス

学会賞・奨励賞・論文賞が決定しました。
→ 4 ページ

第 14 回大会が 3 月 5 日～ 8 日に福島大学で開催されます。
公開シンポジウム (3 月 8 日 13:30～16:30) にご参加ください。
→ 11 ページ

目 次

会長再任にあたって	2
新評議員あいさつ	3
役員等一覧	3
諸報告	
2015 年度第 14 回日本植物分類学会賞 (学会賞・奨励賞)	
受賞者の決定	4
2015 年度第 9 回日本植物分類学会論文賞の決定	6
2014 年度日本植物分類学会講演会の報告	6
植物分類学会講演会に参加して	7
2014 年度第 1 回メール評議員会議事抄録	10
2015 年度第 1 回メール評議員会議事抄録	10
庶務報告	11
お知らせ	
日本植物分類学会第 14 回大会公開シンポジウムのご案内	11
評議員会開催のお知らせ	12
2015 年度総会のお知らせと審議事項	12
寄稿	
学名のラテン語 (17)	17
植物研究会・同好会紹介	
「帰化植物メーリングリスト」	19
会員消息	20

会長再任にあたって

会長 角野 康郎

今年から2年間、引き続き会長を務めることになりました。宜しく申し上げます。2013年からの2年間をふりかえると、会長としては何も新しいことはできなかったという思いがあります。しかし、幹事や担当委員の皆さんのご尽力、そして何より会員の皆さんのご協力で、植物分類学会の活動は着実に前進しました。

英文誌『APG』は、田村実編集委員長はじめ編集委員の皆さんの努力と積極的に投稿していただいた会員の皆さんの協力で、発行の遅れを取り戻すことができました。和文誌『分類』に連載が開始された「植物分類学研究マニュアル」は、同名の単行本の編集が遅れていることから企画された先行掲載ですが、知りたかったことがわかりやすく書いてあると好評です。植物分類学会の絶滅危惧植物専門委員会が環境省から請け負う形で作業を進めたレッドリストは、多くの会員の現地調査情報をもとに作成されました。間もなくレッドデータブックとして出版されます。

皆さんの調査と研究の進展は、分類学会大会の発表の盛況ぶりや各地の植物研究会誌を拝見しても伺い知ることができます。多くの課題があるとはいえ、植物分類学会のエネルギーは健在です。このような学会の会長をあと2年務めることの責任の重さを痛感するところです。評議員会は再任された5名のベテランと7名の若手～中堅の新任委員から構成されます。評議員会メンバーがこれだけ大幅に入れ替わるのは、実は学会始まって以来初めてです。忌憚のないご意見をいただきながら、新しい執行部で学会の舵取りを行っていきます。

ここでは私の宿題をひとつ書かせていただきます。それは日本の植物分類学のこれからを真剣に考えてみようということです。私は会長に選ばれたときの挨拶（ニュースレター 48号）で、日本の植物分類学研究やフローラの解明に大きな役割を果たしてきた在野の研究者や植物愛好家の高齢化と後継者が育っていない現実にもふれました。そして、地域の自然史研究の拠点となるべき博物館等の施設がまだまだ不十分な実情にもふれました。その状況は、今も変わっていません。しかし、東日本大震災で被災した標本のレスキューの取り組みをみて、さまざまな苦労があったとは思いますが、各地の潜在力とそれを支える人材が日本にはあるのだと心強く感じました。

生物多様性の保全が人類の重大な課題として認識される中、分類学を基礎とする自然史研究の重要性が十分に理解されているとは言えない現実があります。そのような状況を改善するために「普及教育委員会」をつくることが提案されていましたが、具体的な取り組みができないままに今にいたりしました。私は、単に分類学の普及教育にとどまらず、もう少し広い視野で植物分類学の将来を考えるワーキンググループ（期限付き）を早急に設置する準備を進めています。直面する課題を具体的なデータで明らかにし、問題点を整理すること。その上で、将来に向けて分類学会に何ができるのかを提言することがミッションです。

他にも日中韓の国際シンポジウムを立て直すことなど、懸案はいくつもありますが、やはりいちばん大切なのは皆さんの調査・研究が進むことです。地域の植物相の解明から最先端の研究まで、植物分類学には多くの課題があります。シカの食害による野生植物の消滅など、待ったなしの問題もあります。

日本植物分類学会は「植物分類学の研究の進展と普及を図り、もって学術の発展に寄与することを目的とする」と会則にあります。会員の皆さんの調査・研究を支えることも学会の重要な使命であろうと考えています。

本年が更り多い年になることを期待しています。

新評議員あいさつ

評議員 池田 博

これから2年間、12名（池田 博、海老原 淳、岡崎 純子、角川 洋子、梶田 忠、黒沢 高秀、田村 実、坪田 博美、永益 英敏、西田 治文、布施 静香、米倉 浩司）が日本植物分類学会の評議員を務めさせて頂くことになりました。僭越ながら池田が代表としてご挨拶申し上げます。

植物分類学は、他の研究分野の研究材料名を提供することから、植物学における基礎的学問である一方、正しい類縁関係を探るために他の研究分野の研究手法・結果を統合する必要があることから、総合的学問ともいえます。したがって、植物分類学の特徴は、基礎から応用まで幅広い分野の研究を取り入れ、それらを駆使して謎を解明することができることにあります。植物分類学の研究アイデアは、何も特別な研究室だけにあるのではなく、日常の姿の中にも隠されています。例えば、日々通り過ぎる道ばたに生えている雑草の中にもそれはあります。ちょっとした注意力と想像力さえあれば、研究の「たね」がいくらかでも出てくるのが植物分類学の面白さだと思います。会員の皆様のひらめきを発表する舞台としての学会を見守っていきたいと思います。

今期の植物分類学会も、多彩な企画が計画されています。恒例の学術集会、講演会、野外研修会をはじめ、英文誌『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』、和文誌『分類』およびニュースレターの発行が予定されています。また、生物多様性やデータベース構築に関する活動、関係学術団体との連携なども広くおこなわれます。特に今期は2011年につくばで開催される予定で、地震のために中止となった日中韓3国国際シンポジウムの日本での開催が計画されています。これら学会活動がスムーズに進行できるよう、評議員一同努力したいと思います。2年間の任期ですが、どうぞよろしく願いいたします。

役員等一覽 (任期：2015年1月1日～2016年12月31日)

庶務幹事 志賀 隆

今期の役員等および委員会委員長が以下のように決まりましたので報告いたします。

会長：角野 康郎

庶務幹事*：志賀 隆

会計幹事*：池田 啓

図書幹事*：高野 温子

ニュースレター担当幹事*：堤 千絵

ホームページ担当幹事*：矢野 興一

編集委員長：田村 実

和文誌編集委員長：東 浩司

英文誌編集担当委員：田村 実

植物分類学関連学会連絡会・日本分類学会連合担当委員：黒沢 高秀

自然史学会連合担当委員：朝川 毅守

講演会担当委員：岡崎 純子

野外研修会担当委員：西野 貴子

学術会議若手アカデミー担当委員：奥山 雄大

*会則第11条で定める幹事（連続二期まで）

評議員：池田 博、海老原 淳、岡崎 純子、角川 洋子、梶田 忠、黒沢 高秀、田村 実、坪田 博美、永益 英敏、西田 治文、布施 静香、米倉 浩司

監事：五百川 裕，吹春 俊光（今年度の総会まで）

委員会：

編集委員会：田村 実（編集委員長），東 浩司（和文誌編集委員長），池田 博，海老原 淳，大村 嘉人，川窪 伸光，黒沢 高秀，高橋 英樹，高宮 正之，坪田 博美，内貴 章世，仲田 崇志，永益 英敏，西田 佐知子，西田 治文，福原 達人，藤井 伸二，布施 静香，村上 哲明，米倉 浩司，綿野 泰行，David E. Boufford，Jae-Hong Pak，Ching-I Peng，Benito C. Tan

絶滅危惧植物専門第一委員会：藤井 伸二（委員長），海老原 淳，勝山 輝男，加藤 英寿，角野 康郎，川窪 伸光，黒沢 高秀，志賀 隆，芹沢 俊介，高橋 英樹，高宮 正之，藤田 卓，矢原 徹一，横田 昌嗣，米倉 浩司

絶滅危惧植物専門第二委員会：樋口 正信（委員長），有川 智己，井上 正鉄，大村 嘉人，糟谷 大河，柏谷 博之，神谷 充伸，菊池 則雄，北山 太樹，坂山 英俊，田中 次郎，寺田 竜太，長谷川 二郎，服部 力，吹春 俊光，古木 達郎，保坂 健太郎，細矢 剛，宮脇 博己，山口 富美夫，吉田 孝造

植物データベース専門委員会：伊藤 元己（委員長），海老原 淳，梶田 忠，永益 英敏，藤井 伸二，三島 美佐子，山口 富美夫

学会賞選考委員会：秋山 弘之（委員長）

ABS 問題対応委員会：村上 哲明（委員長），伊藤 元己，海老原 淳，坪田 博美，永益 英敏，藤井 伸二，邑田 仁

諸報告

2015 年度第 14 回日本植物分類学会賞（学会賞・奨励賞）受賞者の決定

学会賞選考委員会委員長 高宮 正之

本年度は合わせて 12 名の候補者が推薦されました。学会賞選考委員会において、ご本人や推薦人からご提出いただいた研究概要と業績リストなどの資料等をもとに協議いたしました。その結果、下記のように学会賞と奨励賞をそれぞれ 2 名の方に授与することに決定いたしました。

学会賞

上野 雄規氏（宮城県白石市）
「東北地方の植物相に関する研究」

梶田 忠氏（千葉大学大学院理学研究科 准教授）
「広域分布する海流散布植物の系統分類・系統地理学的研究」

奨励賞

末次 健司氏（京都大学大学院人間・環境学研究科 学振 PD）
「従属栄養植物が独立栄養植物や菌類，送粉者と織り成す多様な相互作用」

保坂 健太郎氏（国立科学博物館植物研究部 研究員）
「きこ採集と標本に基づく進化・多様性研究」
(それぞれ 50 音順)

なお、授賞理由は以下の通りです。

学会賞：

上野雄規氏は、一貫して東北地方を中心とする維管束植物の分類や分布の研究を続け、多数の著書や論文をまとめ、北本州の植物相の解明に大いに寄与されました。また、『大鷹沢の植物誌』（1974）など各地域の植物目録の作成や、『北本州産高等植物チェックリスト』（1991）の編集と目録作成のための基礎資料の取りまとめ、東北大学植物園標本館 TUS などの標本の収集にご尽力されました。それらの成果をもとに、日本植物分類学会第 8 回大会（2009）一般公開シンポジウム「東北地方の植物相の成り立ち」において、「東北地方を北限とする植物の密集地」と題する講演を行い、『分類』第 10 巻（2010）に論文を公表するなど、本学会に多大な貢献をされました。また、東北地方を中心としたフロラ研究を進展させ、会員相互の親睦をはかることを目的に 1981 年に東北植物研究会を設立し、以降 30 年にわたって独力で事務局および編集事務局を担当し、年一回の大会、16 号におよぶ『東北植物研究』の編集発行を一手に引き受けて、東北地方における植物研究者のレベルアップや親睦に多大な貢献をしてこられました。このように、同氏は北本州の植物相の解明および地域の植物研究の振興に顕著な業績を残されています。また、現在宮城県植物誌の編纂に中心的に携わるなど、今後のさらなる活躍も期待されます。

梶田忠氏は、植物系統分類学・系統地理学を一貫して研究してこられました。系統分類学では、分子マーカーを用いて、マメ科、フタバガキ科、ヤナギ科等の分類群の系統関係を明らかにされてこられました。系統地理学では、広域分布する植物群を中心に、種内の遺伝的変異の地理的分布を研究し、分布域の維持や変遷を明らかにされました。特に全世界の熱帯海岸域に分布するグンバイヒルガオ等の植物については、「汎熱帯海流散布植物」という新呼称で、新たな研究分野を開拓してこられたのは特筆に値します。また、マングローブ植物では、全球的研究ネットワークを形成して、精力的に研究を進めておられます。2003 年より米倉浩司氏と共同で、YList として知られる「BG Plants 和名-学名インデックス」の管理運営を行い、学名検索のために研究者のみならず一般の方にも有益なデータベースを web 公開しておられます。本学会では、庶務幹事、評議員、植物分類学関連学会連絡会・日本分類学会連合担当委員を歴任され、日本植物分類学会第 13 回大会（2013）の実行委員長として貢献されました。

このように、上記 2 名は、植物分類学および日本植物分類学会の発展に特に顕著な貢献があったと認められましたので、その深い功績を称え、日本植物分類学会賞を授与することといたしました。

奨励賞：

末次健司氏は、従属栄養植物が生活史を全うするための適応進化を明らかにしてこられました。フィールドでの従属栄養植物の精力的な探索と記載分類を行なった上で、野外観察から分子生物学的解析に至る様々な手法を駆使し、従属栄養植物の実態に迫る研究を展開してこられました。植物相の調査の進んだ日本において 2 種の新種となる被子植物を発見・記載したこと、寄生性獲得に伴う暗い環境への進出が、ショウジョウバエ、トビムシによる花粉媒介やカマドウマによる種子散布など特殊な送粉・種子散布様式への収斂現象を促したことを明らかにするなど、特筆すべき成果を上げられました。これらの研究成果は、専門誌のみならず数々の新聞やテレビ等一般メディアに取り上げられ、高い注目を受けています。『APG』に 3 編、『分類』に 1 編の論文発表および、日本植物分類学会大会で 2 件（2014 年大会口頭発表賞受賞）、日本植物分類学会講演会で 1 件の発表を行いました。

保坂健太郎氏は、菌類、特にきのこ類（担子菌門ハラタケ亜門）の分類・系統・多様性・生物地理を専門に研究を進めてこられました。分類・系統では、スッポンタケ亜綱に属する 4 目（スッポンタケ目、ラッパタケ目、ヒメツチグリ目、ヒステランギウム目）およびハラタケ目ヒドナンギウム科について全世界的にサンプリングを行ってこられました。生物地理では、上記スッポンタケ亜綱に属する 4 目の生態的要求性（菌根性 vs 腐生性など）を特定し、その違いが分布パターンに与える影響を調べておられます。最近では標本に基づく研究を重視しつつ、目に見えない土壌 DNA のメタゲノム解析と子実体データによる多様性解析の比較を進めておられます。これらの成果は数多くの論文としてまとめられています。また、図鑑類の著作も多く、子供向けの本など、菌類学の普及にも貢献されました。本学会では、会計幹事を務められ、『分類』に 1 編の論文発表、日本植物分類学会大会で 8 件の発表を行っておられます。

このように、上記2名は優れた研究業績をあげた将来有望な若手研究者であり、その功績を高く評価し、日本植物分類学会奨励賞を授与することといたしました。

2015年度第9回日本植物分類学会論文賞の決定

論文賞選考委員会委員長 田村 実

2015年度第9回日本植物分類学会論文賞は、2014年に出版された英文誌『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』65巻および和文誌『分類』14巻に掲載された論文のうち、編集委員および論文賞選考委員から推薦された論文5編を論文賞選考委員会において審査し、次の論文に決定しました。

Ebihara, A., N. Nakato, Y. Saito, T. Oka and T. Minamitani. 2014. New records of *Asplenium varians* (Aspleniaceae) and two new hybrids in Japan. Acta Phytotax. Geobot. 65 (2): 53-65.

選考理由：識別形質に乏しく、形態変異が連続的で、種の認識が非常に難しいチャセンシダ属コバノヒノキシダ複合体に対して、形態情報、分子情報、並びに染色体や孢子稔性などの細胞学的情報を組み合わせる研究を行うことにより、日本新産種とその雑種の存在を見抜き、それを分類学的取り扱いに反映させている。雑種形成をとまなう分類が困難な種群の分類学的研究として手本となるものであり、高く評価できる。

2014年度日本植物分類学会講演会の報告

講演会担当委員 岡崎 純子

2014年度の日本植物分類学会講演会が2014年12月13日（土）に大阪学院大学で開催されました。現在の植物分類学会が設立されてから14回目の講演会となります。今回は99名（学生21名）の参加者がありました。学会員は56名、一般の参加者は43名でした。

ご講演頂いた演者とその演題は以下の順でした。

矢野興一（岡山理科大学生物地球学部）：アジア産スゲ属植物の多様性とその進化

小林禎樹（兵庫県植物誌研究会）：

淡路島の植物相の特徴と注目される植物－改訂増補版を出版して

掛澤明弘（京都大学大学院理学研究科）：

屋久島高地における植物の小型化現象－ヒメコナスビを例にして－

菅原敬（首都大学東京・牧野標本館）：

日本産カンアオイ属植物、特に常緑性カンアオイ類についての分類学的研究の現状と課題

長谷部光泰（基礎生物学研究所）：陸上植物の面白さ

末次健司（京都大学大学院人間・環境学研究科）：

従属栄養植物の奇妙な生活－植物が光合成をやめる際、必要になる適応とは？

林一彦（大阪学院大学経済学部）：

高貴なユリ カサブランカの交配親でもある絶滅危惧種タモユリの現状

多岐にわたる内容でしたがどの方もわかりやすく話して下さいました。矢野さんによる分類同定に苦労するスゲ属植物の現在分かっている分子系統とその形質進化の話、小林さんによる淡路島の植物相の改訂から見てきた植物相の特徴と現在の問題点、掛澤さんによる屋久島におけるいわゆるミニチュア植物の進化過程について圃場実験の解析の結果から見てきた新知見の紹介、菅原さんによる多くの研究者

を古くから引きつけるカンアオイ属植物の魅力と研究の進展、そして分子系統解析の難しさの現状、長谷部さんによる進化発生学的な観点からの分類形質の進化、特に遺伝子発現と形態の対応から分かる目から鱗が落ちる様々な材料のお話、末次さんによる従属栄養植物の驚くべき受粉や種子散布という今までわかっていなかった生活史戦略、そして林さんによる血だらけになりながら孤島の絶壁での絶滅危惧種タモトコリ採取の様子の話と、若手、中堅、そしてベテランと幅広い演者の方々の講演を聞くことができました。どの講演のあとも質問が多くなされ参加した方々それぞれが満足したようでした。

終了後に開催された懇親会には 36 名の参加者があり、演者を囲みプロ・アマチュアの研究者の方々も参加され、楽しく時を過ごすことができました (写真 1)。

お話を提供して下さった演者の 7 名の方々、特に大病での退院直後にもかかわらず楽しい講演をして下さった末次さん、また参加者の皆様方、毎年素敵な会場の提供と準備をして下さっている大阪学院大の林一彦先生に感謝いたします。



写真 1. 懇親会での集合写真

植物分類学会講演会に参加して

小原 昌之 (大阪教育大学大学院)・加藤 潤・寺田 怜史・松本 美穂・南 慎二郎・雪山 大樹 (大阪教育大学理科教育専攻)

2014 年度日本植物分類学会講演会が 12 月 13 日 (土) に開催されました。前回の講演会と同様大阪学院大学で行われ、スペースも広く、機器設備も整った会場でした。僕たちを含め植物分野における学術的な内容に関して初心者と言ってもよい学生や一般の方々も参加するため、講演内容も専門的なことから一般向けの分かりやすいことまで多岐にわたっており、さらに普段は聞くことが出来ないような貴重な御話を専門家である方々から伺うことが出来るため、今回の講演会でも多くのことを学ぶことが出来ると、参加前からとても期待を膨らませていました。

矢野先生は、アジア産スゲ植物の多様性とその進化について講演して下さいました。スゲ属はカヤツリグサ科植物のひとつです。カヤツリグサ科植物は世界に 100 属 5000 種あり、単子葉植物でラン科、イネ科に次ぎ、3 番目に種数が多いそうです。その中のスゲ属は世界に約 2000 種あり、分布域としては高山帯から海岸、乾燥地から湿地まで様々な環境に生育し、極地以外すべての大陸に分布しているとのことでした。日本には約 250

種分布しており、そのうち約半数は日本固有のものだそうです。また中国には約 500 種分布しており、アジアに多くの種が分布していることが分かりました。スゲ属の染色体は分散型動原体染色体で、動原体の機能が染色体全体に分散しているそうです。そのために染色体が切れても、その断片は動原体を持っているために消失せずに生き残るとのことでした。またスゲ属はスゲ亜属、原始スゲ亜属、マスクサ亜属、ハナビスゲ亜属の 4 亜属に分類されます。しかし最近の DNA 解析からこの 4 亜属はまとまらないということが分かったそうです。矢野先生はスゲ属の中でも特にタガネソウ節について特に研究しておられ、中国でのサンプリングの様子など、講演の中で様々な写真を紹介してくれました。

小林さんは淡路島の植物相について講演して下さいました。淡路島といわれると兵庫県から四国にまたがる島であるということは知っていますが、その概要は知らない人が多いことから、まず淡路島の基本情報から説明をして下さいました。面積、地形、気候、地質と対応して植物が

どのような場所に育つか、まず実際の淡路島の地形の特徴について紹介し、次に淡路島の植物を紹介してくださいました。改訂増補版を出すにあたり淡路島の関心が高まったこと、新たに確認された植物のうち、地域固有種1種であるサイコイカリソウ、分布限界種6種とそれに近い種、隔離分布種2種としてミミガタテンナンショウとイヨトンの紹介をして下さいました。さらに淡路島の植物の不思議として、モロコシソウとセンダングスの分布を地図を用いて紹介して下さいました。なぜ淡路島にクロモジが分布しないのか、またコケトウバナが屋久島と淡路島をつないでいることが考えられることを紹介して下さいました。淡路島の植物のレッドデータブックに記載されている植物の現状、シカによる被害を紹介し、最後にその他にも生育する植物の紹介をして下さいました。大阪からすぐ近くの淡路島でも知らないことがたくさんあり、非常に楽しい講演でした。

掛澤さんは屋久島高地における植物の小型化について講演して下さいました。屋久島では約82種の植物分類群が小型化しているそうです。その中の1種にヒメコナスビがあるそうです。ヒメコナスビはコナスビの近縁であり、サクラソウ科、オカトラノオ属、屋久島に生育する屋久島に固有の種です。コナスビに比べて細胞数、サイズの両方が小型化していて、葉が特に小型化しています。この形態の違いが環境的なものによるものなのか、遺伝的なものによるものなのか、そのバックグラウンドを探るために、低地、高地、様々な場所から種子を採取して、それぞれを共通圃場で育て解析しました。その結果、個体における最大葉の葉身長、幅、葉の表皮細胞面積、細胞数、主シュート長と乾燥重量は低地から採取した種子由来のものが大きくなったことがわかりました。この

ことからヒメコナスビの小型化は遺伝的なバックグラウンドを有しているのではないかと推察しました。また、これが自然選択によるのかを形態形質の集団分化の指標である Qst と中立的遺伝マーカーを用いて算出した Fst の比較を行い、その結果からヒメコナスビの小型化は適応進化の結果であることが高い可能性を導き出しました。植物の適応進化に触れ、その大きな可能性を知ることのできる講演でした。

菅原先生は日本産カンアオイ属植物の分類学的研究の課題について講演して下さいました。カンアオイは江戸時代から愛される植物で、その斑入りの模様の多彩さが人々の目を引いていたようです。そんなカンアオイ属は2系統に分類されるとされています。その中でもカンアオイは最も多様であるそうです。その特徴として①花の形態が多様なこと、②分布域が狭いこと（近縁種が異所的に分布）、③地際に花を咲かす特異な花であること、④葉痕が残る地下茎をもつという4つの点を挙げていました。同時に課題として、①花が著しく特異、②どのように分化したか、③地理的な問題、④繁殖生態学的な問題の4点を挙げていました。そのような課題の中、何種類かのカンアオイを例に分類の話をして下さいました。ミヤコアオイには倍数性があり、 $3x$ のものがあるとのこと。当初個体群の中に少し変なミヤコアオイがあることに気づき、解析したそうです。そのことにより同所的に $2x$ 個体と $3x$ 個体が生育しているとのことがわかりました。そして新分類群を飛騨山脈で見つけたけれど分類するためには外部形態からでは区別がつかず、DNAで解析するにも困難な点が多いとのことでした。分類は台湾と日本の系統と中国の系統のものが別に分かれることがわかったそうですが、まだぎっしりと分類することは難しいとのことでした。そのため今後の研究が楽しみとなる研究内容でした。

長谷部先生は陸上植物の面白さについて講演して下さいました。その面白さについて、形質進化の研究の紹介を踏まえながら紹介しました。昔と比べ、今では、ゲノム解析や遺伝子操作実験が短期間かつ低価格でできるようになったことにより手軽に解析ができ、とてもおもしろい時代になったそうです。コモウセンゴケのゲノム解析、オジギソウへの遺伝子導入、ドクダミへの花成ホルモン導入などの研究を紹介して下さいました。たとえばオジギソウの葉の開閉運動について、今までは水の移動による膨圧の差が主な原因と言われて



写真1. 講演会の様子（小林さんの講演）

きました。しかし葉の断面を観察してみると、葉の中央部にへこみがあり、少しの水の移動でバランスがくずれ葉が動くことが原因であり、結果として水が移動していたということが分かったそうです。これを長谷部先生は、漫画「巨人の星」に出てくる大リーグボール養成ギブスにたとえ、専門家だけでなく私たち学生のような一般向けに分かりやすく説明して下さいました。様々な植物に関する研究についてのお話を聞き、植物の形態の進化や仕組みを明らかにしていくことで新たな発見があり、これからますます多くの事がわかっていくのだろうと思うと大変面白い講演でした。

末次さんは従属栄養植物の光合成について講演して下さいました。従属栄養植物とは、生育に必要な炭素を得るために有機化合物を利用する生物のことをいい、菌従属栄養植物と植物従属栄養植物に分けられます。植物従属栄養植物は光合成を行うものと光合成を行わないものがあるそうです。従属栄養植物は、発見が困難であり、分布情報がよく分かっていないことが多いため、研究されている数が少ないそうです。暗い林床に生育する従属栄養植物のなかには虫媒での受粉達成は困難であるため、自家受粉に進化した種があります。その他にもヤッコソウは酵母などの菌類と共通のシグナル(におい)によって訪花性ではない昆虫を呼び、ヤツシロランではキノコと共通のシグナルを発することがわかったそうです。また種子散布に関して、初期従属栄養植物は風散布であるが、風がない環境では植物の背が高くなる傾向があり、キヨスミウツボとギンリョウソウはカマドウマによって果実が食べられることで種子が散布されるとのことでした。従属栄養植物はそのような特異な性質を獲得するために、宿主との関係だけでなく、送粉・種子散布様式などの面でも数奇な適応を遂げているということが考えられました。なかなか見ることのない従属栄養植物を知る良い機会となりました。

林先生は今回特別講演と言うことで、タモトユリの現状について講演して下さいました。日本には自生ユリが15種生育しており、その内の一種類がタモトユリです。このタモトユリはカサブランカの交配親となっています。タモトユリは自生地では西海岸の崖壁にしか生育していないそうです。栽培種のタモトユリは、種子から開花まで8年、早くても3年かかるそうです。自然状態では10年近くかかるのではないかとされているそうです。また現地では花は大きく18cmほどになるそうです

が、日本本土では15cmほどと、小さくなるとのことでした。調査地の生育調査では海上から崖壁を見る方法と、実際に上陸し崖を登る方法を取ったそうです。この調査により10年ぶりにタモトユリの自生を確認できました。しかしタモトユリにはまだまだ課題が多く、現在日本で栽培されているタモトユリは少数の種子由来の個体で、その多様性が著しく低く、鑑賞のため特定の形質へ選択がかかっていることが課題として挙げられました。しかし今回の自生の確認でタモトユリの多様性が守られることが期待できる講演内容でした。

今回の講演内容は、様々な分野から構成されており、非常に多くのことを学ぶことができました。どの演者の方々も一般の聴衆や僕たち学生にも、分かりやすく聞けるよう工夫して下さいましたので、大変分かりやすい講演でした。数多くの貴重な御話をして下さいました演者の方々、ご講演ありがとうございました。



写真2. 講演会の様子(菅原先生の講演)

2014 年度第 1 回メール評議員会議事抄録

庶務幹事 志賀 隆

2014 年 12 月 15 日～2014 年 12 月 28 日に 2014 年度第 1 回メール評議員会が開催されましたので、議事抄録を報告します。この会議は事業報告案と会計決算案を評議員の方々に審議していただくものです。なお、12 月末日が会計締切りであるため、この 2014 年第 1 回メール評議員会での決算額に概算部分があります。3 月 5 日の評議員会と 7 日の総会にて提案されます同議案には、その概算部分について最低限の修正が加えられている箇所がありますことをご了承ください。

開催日時：2014 年 12 月 15 日～2014 年 12 月 28 日

開催方法：電子メール等の媒体を用いた会議

参加者：評議員全員

議長選出

慣例にしたがい角野康郎氏を議長とすることに反対はなかった。

審議事項

第 1 号議案 2014 年度事業報告案

第 2 号議案 2014 年度決算案

審議結果

第 1 号議案は、賛成 10 票、反対 0 票、白票 3 票で承認された。

第 2 号議案は、賛成 10 票、反対 0 票、白票 3 票で承認された。

議事録署名人として仲田崇志氏と藤井伸二氏が選出された。

2015 年度第 1 回メール評議員会議事抄録

庶務幹事 志賀 隆

2015 年 1 月 7 日～2015 年 1 月 21 日に 2015 年度第 1 回メール評議員会が開催されましたので、議事抄録を報告します。この会議は事業計画案と会計予算案を評議員の方々に審議していただき、総会までの会務・会計執行の指針を得るためのものです。なお、本ニュースレターでお知らせする 3 月 5 日の評議員会と 7 日の総会に提案される議案には、その後の推移を反映した最低限の修正が加えられている箇所がありますことをご了承ください。

開催日時：2015 年 1 月 7 日～2015 年 1 月 21 日

開催方法：電子メール等の媒体を用いた会議

参加者：評議員全員

議長選出

慣例にしたがい角野康郎氏を議長とすることに反対はなかった。

審議事項

第 1 号議案 2015 年度事業計画案

第2号議案 2015年度予算案

審議結果

第1号議案は、賛成12票、反対0票、白票1票で承認された。

第2号議案は、賛成11票、反対0票、白票2票で承認された。

議事録署名人として池田博氏と海老原淳氏が選出された。

庶務報告 (2014年11月～2015年1月)

庶務幹事 志賀 隆

沖縄県大浦湾の環境保全を求める19学会合同要望書を防衛大臣、沖縄防衛局長、環境大臣、沖縄県知事宛てに提出しました(11月11日)。要望書の全文と添付資料は日本植物分類学会のホームページの「意見書・要望書」の項目からご覧いただけます。

お知らせ

日本植物分類学会第14回大会公開シンポジウム

「これからの標本室

～ハーバリウムの管理・運営や情報発信、利用に関する新しい流れ～」のご案内

第14回大会会長 黒沢 高秀

福島で行われる第14回大会の最終日に、標本室に関する標記の公開シンポジウムを開催します。ふらってご参加下さい。

【日時】2015年3月8日(日) 13:30～16:30

【場所】福島大学共通講義棟L4教室(福島市金谷川1)

【参加費】無料

【内容】

標本室というと、一般の人はもちろん植物分類学者であっても、薄暗い部屋に大量の押し葉やダンボール、ナフタレンの匂い等なんだか古くさいイメージがあるかもしれません。しかし、標本室は、植物に関する数万点以上の実物資料と産地や生育年などの情報の集積場所であり、植物分類学的研究には、時には生態学的研究にも、かけがえのない「宝の山」です。近年、その「宝の山」を引き継いだ若手の研究者によって、その特性を活かした標本室の管理・運営や情報発信の試みがなされるようになってきました。また、そのような管理・運営や情報発信をうまく利用することにより、以前は難しかった課題に取り組む研究も現れました。『日本の固有植物』(加藤雅啓・海老原淳[編])に記された、全ての固有植物の標本にもとづく分布図は記憶に新しい所です。そのような管理・運営や情報発信をする標本室がもっと増えれば、標本にもとづく検証可能な植物誌や精度の高いレッドデータブックの作成など植物分類学的研究や関連分野の研究の進展を大きく促すでしょう。本シンポジウムでは、このような標本室の新しい流れについてご紹介し、これからの標本室のありかたについて議論したいと思います。

【講演者と演題】

1. 海老原淳(科博・植物)「21世紀のハーバリウム運営～国立科学博物館の挑戦～」
2. 志賀隆(新潟大・教育)「その標本のタネ、生きてますよ! : 標本種子を用いた絶滅集団復元の試み」
3. 細矢剛(科博・植物)「なまものと標本がつなぎ広げる菌類分類学～菌類資料の特徴とその活用」

4. 黒沢高秀(福島大・共生システム理工)「公的標本室をつくろう ～つくる人, 寄贈する人, 支える人～」
【オーガナイザー】兼子伸吾・黒沢高秀

公開シンポジウムの前のお昼の時間に、福島県の化石植物に関するランチョンセミナーを開催いたします。こちらにも参加無料で、一般の方も大歓迎、お昼を食べながら可ですので、お気軽にご参加下さい。

高橋正道(新潟大・自然科学系) 福島県広野町に咲いていた白亜紀の花々(上北迫植物化石群)
- 第30回国際生物学賞受賞者 クレイン教授との共同研究 -

問い合わせ: 日本植物分類学会第14回大会準備委員会 黒沢高秀
tel & fax: 024-548-8201, e-mail: jsps2015fukushima@gmail.com

評議員会開催のお知らせ

庶務幹事 志賀 隆

日本植物分類学会第14回大会(於:福島大学)の開催に合わせ、下記の通り評議員会を開催します。評議員、幹事会等の関係各位のご出席をお願いいたします。

日時: 2015年3月5日(木) 16時~19時

会場: 福島大学生協レストラングリーン(福島県福島市金谷川1)

詳細は関係各位において連絡いたします。審議事項についてご意見やご希望がございましたら、評議員、会長、幹事、委員長のいずれかにお伝えください。

2015年度総会のお知らせと審議事項

庶務幹事 志賀 隆

3月7日に開催される総会において、以下の議案が審議されます。会員各位の参加をお願いします。

1. 2014年度事業報告案(12-13ページ参照)
2. 2014年度決算報告案(14ページ参照)
3. 2015年度事業計画案(15ページ参照)
4. 2015年度予算案(16ページ参照)

2014年度事業報告(案)

(1) 集会等の開催

・学術集会, 講演会, 研修会

年次学術集会(日本植物分類学会第13回大会: 3月20~23日熊本大学黒髪南キャンパス)を開催した(ニュースレター No. 53で報告)。

2014年度講演会(12月13日, 大阪学院大学)を開催した(ニュースレター No. 56で報告)。

2014年度野外研修会(青森県八甲田山周辺)を開催した(7月11日~13日)(ニュースレター No.

55 で報告)。

・総会、評議員会

年次総会を年次学術集会に合わせて開催した (3月22日) (ニュースレター No. 53 で報告)。

評議員会を1回 (ニュースレター No. 53 で報告)、メール評議員会を1回開催した (ニュースレター No. 56 で報告)。

(2) 出版物の刊行

・学会誌の発行

英文誌『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』第65巻1～3号 (計3冊) を発行した。

和文誌『分類 [日本植物分類学会誌]』第14巻1～2号 (計2冊) を発行した。

・ニュースレター

『日本植物分類学会ニュースレター』52～55号 (計4冊) を発行した。

・『国際藻類・菌類・植物命名規約 (メルボルン規約) 2012 [日本語版]』を出版した。

(3) 委員会活動

以下の委員会を組織し、目的に沿って活動した。

・絶滅危惧植物専門第一委員会

・絶滅危惧植物専門第二委員会

・植物データベース専門委員会

・学会賞選考委員会 (ニュースレター No. 56 で報告)

・論文賞選考委員会 (ニュースレター No. 56 で報告)

・大会発表賞選考委員会 (ニュースレター No. 57 で報告予定)

・国際命名規約邦訳委員会

・ABS 問題対応委員会

・普及教育に関する委員会の編成準備として幹事会での意見交換を行った。

(4) 表彰

・日本植物分類学会賞 (学会賞・奨励賞) の授与を行った (ニュースレター No. 52 で報告)。

・日本植物分類学会論文賞の授与を行った (ニュースレター No. 52 で報告)。

・日本植物分類学会大会発表賞の授与を行った (ニュースレター No. 53 で報告)。

(5) 国内外の関係学術団体との連携・協力

・国内学会連合等への参加・連携を行った: 日本学術会議, 自然史学会連合, 日本分類学会連合など。

・国際シンポジウム開催の準備を進めた。

(6) その他

・学会刊行物のバックナンバー等の販売と整理を行った。

・植物分類学関連情報 (学術集会, 研究動向, 出版物, 公募) を収集し, ニュースレター, ホームページ等で提供した。

・学会刊行物の国内外の研究機関への寄贈と交換を行った。

・植物分類学研究マニュアルの作成と和文誌『分類』への原稿掲載 (第14巻1～2号) を進めた。

・会長・評議員の選挙を行った (ニュースレター No. 54 で報告)。

・沖縄県大浦湾の環境保全を求める19学会合同要望書を防衛大臣, 沖縄防衛局長, 環境大臣, 沖縄県知事宛てに提出した (ニュースレター No. 56 で報告)。

2014年度決算報告(案) (2014.12.31現在)

収入の部	単価	数	予算	決算	予算との差異
会費					
通常(一般)	5,000	745	3,725,000	3,430,240	294,760
通常(学生/海外)	3,000	97	291,000	147,000	144,000
団体会員	8,000	21	168,000	112,000	56,000
バックナンバー販売			100,000	221,572	△121,572
命名規約販売			20,000	7,500	12,500
利息			1,000	852	148
雑収入			50,000	70,951	△20,951
小計			4,355,000	3,990,115	364,885

支出の部	単価	数	予算	決算	予算との差異
大会補助費			100,000	100,000	0
講演会補助費			70,000	70,000	0
出版物印刷費					
APG vol.65(1,2,3)	720,000	3	2,160,000	2,260,687	△100,687
分類vol.14(1,2)	750,000	2	1,500,000	1,489,740	10,260
ニュースレターNo.52-55	55,000	4	220,000	255,326	△35,326
英文校閲費			50,000	50,000	0
出版物送料					
APG送料	80	3,300	264,000	156,186	107,814
和文誌送料	80	2,000	160,000	72,102	87,898
NL送料	60	4,000	240,000	147,338	92,662
会議費			50,000	52,600	△2,600
学会賞表彰経費			60,000	39,280	20,720
自然史学会連合負担金			20,000	20,000	0
分類学会連合分担金			10,000	10,000	0
事務局管理費					
消耗品費			50,000	5,996	44,004
交通費			100,000	146,878	△46,878
アルバイト賃金			470,000	394,341	75,659
封筒等印刷費			0	0	0
通信費(小包手数料を含む)			70,000	86,410	△16,410
手数料・その他			30,000	26,130	3,870
自動振替集金代行基本料			3,150	3,150	0
自動振替口座確認手数料	126	170	21,420	19,761	1,659
自動振替新規手数料			0	0	0
レンタルサーバー使用料			26,000	25,884	116
国際シンポジウム積立金			300,000	300,000	0
予備費			150,000	40,000	110,000
合計			6,124,570	5,771,809	352,761

単年度収支	△1,769,570	△1,781,694	12,124
前年度からの繰越金	8,653,766	8,653,766	0
次年度への繰越金	6,884,196	6,872,072	12,124

注1:ウィーン規約の販売分

注2:複数誌の同時発送により節約

注3:通常会計作業補助、年次大会会場における会計作業補助、編集作業補助を含む

特別会計 2014年度決算(案)

収入	2014年度予算	2014年度決算	予算との差異
前年度繰越金	2,839,121	2,839,121	0
国際シンポジウム積立金	300,000	300,000	0
命名規約和訳販売	1,378,600	276,612	注2
寄付	0	0	0
利息	0	0	0
合計	4,517,721	3,415,733	1,101,988
支出			
命名規約和訳出版	1,889,121	860,092	△1,029,029
国際シンポジウム準備金	900,000	0	△900,000
日中韓シンポジウム若手派遣	0	0	0
次年度への繰越金	1,728,600	2,555,641	827,041
合計	4,517,721	3,415,733	1,101,988

注1:一般会計から移管

注2:出版社(北隆館)との契約に基づく。

注3:シンポジウム開催をしなかったため未執行

2015 年度事業計画 (案)

(1) 集会等の開催

- ・ 学術集会, 講演会, 研修会
年次学術集会 (日本植物分類学会第 14 回大会: 3月5~8日 福島大学) を開催する。
2015 年度講演会を開催する (12月19日, 大阪学院大学)。
2015 年度野外研修会を開催する (日時, 場所共に未定)。
- ・ 総会, 評議員会
年次総会を年次学術集会に合わせて開催する (3月7日)。
評議員会を開催する (3月5日)。

(2) 出版物の刊行

- ・ 学会誌の発行
英文誌『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』第 66 巻 1~3 号 (計 3 冊) を発行する。
和文誌『分類 [日本植物分類学会誌]』第 15 巻 1~2 号 (計 2 冊) を発行する。
- ・ ニュースレター
『日本植物分類学会ニュースレター』56~59 号 (計 4 冊) を発行する。

(3) 委員会活動

以下の委員会を組織し, 目的に沿って活動する。

- ・ 絶滅危惧植物専門第一委員会
- ・ 絶滅危惧植物専門第二委員会
- ・ 植物データベース専門委員会
- ・ 学会賞選考委員会
- ・ 論文賞選考委員会
- ・ 大会発表賞選考委員会
- ・ ABS 問題対応委員会
- ・ 国際シンポジウム準備委員会

(4) 表彰

- ・ 日本植物分類学会賞 (学会賞・奨励賞) の授与を行う。
- ・ 日本植物分類学会大会発表賞の授与を行う。
- ・ 日本植物分類学会論文賞の授与を行う。

(5) 国内外の関係学術団体との連携・協力

- ・ 国内学会連合等への参加・連携を行う: 日本学術会議, 自然史学会連合, 日本分類学会連合など。
- ・ The Korean Society of Plant Taxonomists (KSPT), および Taxonomy and Evolution Division, the Botanical Society of China (BSC) 等と連携する。
- ・ 国際シンポジウムの開催に向けて準備を進める。

(6) その他

- ・ 学会刊行物のバックナンバー等の販売と整理を行う。
- ・ 植物分類学関連情報 (学術集会, 研究動向, 出版物, 公募) を収集し, ニュースレター, ホームページ等で提供する。
- ・ 学会刊行物の国内外の研究機関への寄贈と交換を行う。
- ・ 植物分類学研究マニュアルの作成と和文誌『分類』への原稿掲載を進める。
- ・ 植物分類学の将来の発展と普及に関連して, 会長が諮問するワーキンググループを設置する。

2015 年度予算 (案)

収入の部	単価	数	予算	前年度予算との差異
会費				
通常(一般)	5,000	734	3,670,000	△ 55,000 注1
通常(学生/海外)	3,000	80	240,000	△ 51,000 注1
団体会員	8,000	20	160,000	△ 8,000 注1
バックナンバー販売			100,000	0
命名規約(ウィーン規約)販売			0	△ 20,000 注2
利息			1,000	0
雑収入			50,000	0
合計			4,221,000	△ 134,000

支出の部	単価	数	予算	前年度予算との差異
大会補助費			100,000	0
講演会補助費			70,000	0
出版物印刷費				
APG vol.66(1,2,3)	720,000	3	2,160,000	0
分類vol.15(1,2)	750,000	2	1,500,000	0
ニュースレターNo.56-59	55,000	4	220,000	0
英文校閲費			50,000	0
出版物送料				
APG送料	80	3,000	240,000	△ 24,000 注3
和文誌送料	80	2,000	160,000	0
NL送料	60	4,000	240,000	0
会議費			50,000	0
学会賞表彰経費			60,000	0
自然史学会連合負担金			20,000	0
分類学会連合負担金			10,000	0
事務局管理費				
消耗品費			50,000	0
交通費			100,000	0
アルバイト賃金			470,000	0
封筒等印刷費			250,000	250,000 注4
通信費(小包手数料を含む)			70,000	0
手数料・その他			30,000	0
自動振替集金代行基本料			3,240	90 注5
自動振替口座確認手数料	126	170	21,420	0
自動振替新規手数料			0	0
レンタルサーバー使用料			26,000	0
国際シンポジウム積立金			300,000	0
予備費			100,000	△ 50,000 注6
合計			6,300,660	176,090

単年度収支	△ 2,079,660
前年度からの繰越金	6,872,072
次年度への繰越金	4,792,412

注1: 会員数見直しによる(新入会・名譽会員増・退会・除名・逝去など)

注2: メルボルン規約販売開始による。

注3: 発行部数見直しにより減額。

注4: 新執行部による運営開始に伴い新たな封筒の印刷が必要になるため。

注5: 消費税にともなう変更。

注6: 会長・評議員の選挙がないため減額。

特別会計 2015年度予算(案)

収入	2015年度予算	前年度予算との差異
前年度繰越金	2,555,641	△ 283,480
国際シンポジウム積立金	300,000	0 注1
命名規約和訳販売	35,520	1,378,600 注2
寄付	0	0
利息	0	0
合計	2,891,161	△ 1,626,560

支出	2015年度予算	前年度予算との差異
命名規約和訳出版	0	△ 1,889,121 注3
国際シンポジウム準備金	1,200,000	300,000 注4
日中韓シンポジウム若手派遣	0	0 注5
次年度への繰越金	1,691,161	△ 37,439
合計	2,891,161	△ 524,572

注1: 2012年度より一般会計から移管

注2: 出版社との契約に基づく

注3: 出版にともなう経費(会議費含む)

注4: 開催に係る準備金

注5: 今年度は海外での開催は無いため

寄稿

学名のラテン語 (17)

永益英敏 (京都大学総合博物館)

種と種内分類群の学名の形容語-属格の名詞 (2): 人名を記念した形容語 1

属格の名詞を用いた学名の形容語として最もなじみがあるのは、人名を記念した形容語であろう。特徴的な形態形質を示す形容語がすでに発表されていて使用できない場合など、人名や地名などの固有名詞に基づいた形容語をつくって新学名とすることは多い。

人名をもとにしてラテン語の属格名詞をつくるためには、「国際藻類・菌類・植物命名規約」(ICN; McNeill et al. 2012) の第 IX 章 (正字法) 勧告 60C.1. に規定がある。勧告の文章は長いので、下の表の形にまとめてみた。この規定では人名のつづりの末尾が何であるかによって、人名に付加すべき属格語尾のみが記されている。実際の適用に際してはこれで問題はないのだが、それがどのような文法的背景をもっているかわかりにくいので、解説を加えておきたい。

現代人の名前は古典ラテン語の名詞ではないので、ラテン語の 5 つの名詞変化形にそのまま当てはめることはできないのは明らかである。したがって、最低限の変更を加えて人名をラテン語風にし、その語尾を属格に変化させるという方法をとる。前回 (永益 2014) の、ラテン語の名詞の変化表を参照しながら以下を読んでいただきたい。以下の単語中のハイフンは付加した語尾を示すために用いたもので、形容語として使用する時には削除される。

1) 人名の末尾が -a で終わる場合、その人物が男であっても女であっても、その名前を第一変化名詞として扱う。Tamura は語尾が -a で終わるので、そのまま第一変化名詞 Tamura とし、その属格は単数形 *tamura-e*、複数形 (たとえば Tamura 親子などの場合) *tamura-rum* となる。語尾が a で終わると女性のように思われがちだが、ローマ時代の哲学者 Seneca (男) は第一変化の男性名詞であり、その単数属格は *Senecae* である。

2) 人名の末尾が -a 以外の母音または -er で終わる場合、その人物が男であれば -us を付加して第二変化名詞をつくり、女であれば -a を付加して第一変化名詞をつくる。ローマ時代の政治家 Gaius Julius Caesar が属した氏族の名 (通常前から 2 番目が氏族名) は、男ならば Julius (第二変化名詞) だが、女の場合には Julia (第一変化名詞) と変化した。この例にならって「ラテン人名」をつくるのである。たとえば Nagamasu (男) から (ラテン人名 Nagamasu-us) 属格 *nagamasu-i* (複数 *nagamasu-orum*)、Nagamasu (女) から (ラテン人名 Nagamasu-a) 属格 *nagamasu-ae* (複数 *nagamasu-arum*) となる。

3) 人名が子音 (ただし -er を除く) で終わるならば、語尾の前にさらに語幹接頭母音 -i- を加えた -i-us (男)、-i-a (女) を付加してラテン人名をつくる。日本人の名では子音で終わるものは少ないが、たとえば Domon (男) から (ラテン人名 Domon-i-us) 属格 *domon-i-i* (複数 *domon-i-orum*)、Domon (女) から (ラテン人名 Domon-i-a) 属格 *domon-i-ae* (複数 *domon-i-arum*) となる。人名の属格を用いた形容語の語尾が、-ii のように i が重なることが多いのは、このことによる。

この勧告 60C.1 の用法にしたがっていない属格語尾は「訂正されるべき誤り」として扱われるため、原発表時の綴り (原綴り original spelling) であっても訂正してよい (第 60.12 条)。例をあげると、男性である原寛 (H. Hara, 1911-1986) を記念してつくられた属格名詞の形容語 *hara-i* は勧告 60C.1 の用法に合致しないため、誤りとして *hara-e* と訂正されることになる。このように ICN では、属格語尾がどのようになるかはもとの人名によって厳密に定まっているのである。

現代人の名前を属格名詞の形容語とする場合の勧告 60C.1 では、第一変化名詞が第二変化名詞の場合のみしか扱われていないが、勧告 60C.2 には第三変化名詞として扱う場合の例がある。勧告に扱われている事例ではないが、日本人の名字であれば、たとえば人名 Kato を第三変化名詞として扱い、ラテン語 *natio* (国民, 属格 *nationis*) のように属格を *katonis* とするものである (ローマ時代の政治家 Cato の単数属格は *Catonis*)。これは意図されているラテン人名 (Kato) が 60C.1. で規定している *Kato-us* とは異

なるため、第 60.12 条の適用による訂正の対象とはならないが、勧告 60C.2 は「近現代の名字、すなわち定着したラテン語形をもたない名字を、あたかも第三変化名詞であるかのように扱うことは避けるべきである」と述べている。

これ以外に、勧告 60C.2 には、「すでにギリシャ語やラテン語にある人名、または定着したラテン語形をもつ人名を用いて新しい名詞の形容語をつくるためには、それらの名前の適切なラテン語の属格を用いるべきである」とあり、勧告 60C.3 には「定着したラテン語形をもつ人名に基づく新しい形容語は、ラテン語化名の伝統的な使用法を保つべきである」としていることに注意しておきたい。

一方、「動物命名規約」(ICZN; Ride et al. 1999) では、語尾（後綴り subsequent spelling という）の扱いが大きく異なっている。ICZN (条 31.1.2) では、人名が男であれば、その語尾に *-i* を、女性であれば *-ae* を付加して単数属格の形容語をつくる。複数形はそれぞれ *-orum* (男)、*-arum* (女) であり、後者は構成する人物がすべて女である場合にのみ使用される。すなわち、ここで暗黙のうちに意図されているラテン人名は、男ならば語尾に *-us* をつけて第二変化名詞とし、女ならば *-a* をつけて第一変化名詞としたものということである。さらに、この規定に示されたものと異なる用法で、人物を記念する属格名詞の形容語がつくられたとしても、原綴りを優先して訂正はされない。

国際藻類・菌類・植物命名規約勧告 60C.1. が規定する、現代人の人名に基づく属格名詞の形容語

人名の末尾	人物の性	付加する属格語尾		例 [現代人の人名の後の () は暗黙のうちに意図されているラテン語化された人名]
		単数	複数	
a	男・女	-e	-rum	Tamura (Tamura: 第一変化) から tamura-e (単数), tamura-rum (複数)
a 以外の母音 または -er	男	-i	-orum	Nagamasu (Nagamasu-us: 第二変化) から nagamasu-i (単数), nagamasu-orum (複数)
	女	-ae	-arum	Fuse (Fuse-a: 第一変化) から fuse-ae (単数), fuse-arum (複数)
子音 (-er を除く)	男	-i-i	-i-orum	Domon (Domon-i-us: 第二変化) から domon-i-i (単数), domon-i-orum (複数)
	女	-i-ae	-i-arum	Daian (Daian-i-a: 第一変化) から daian-i-ae (単数), daian-i-arum (複数)

McNeill, J. et al. (eds.) 2012. International Code of Nomenclature for algae fungi, and plants (Melbourne Code). Koeltz Scientific Books, Königstein.

永益英敏. 2014. 学名のラテン語 (16) 種と種内分類群の形容語-属格の名詞 (1). 日本植物分類学会ニュースレター 54: 4-5.

Ride, W. D. L. et al. (eds.) 1999. International Code of Zoological Nomenclature, 4th edition. International Trust for Zoological Nomenclature 1999, London.

編集室より

今号よりニュースレター担当幹事となりました。「伝わるデザイン」(<http://tsutawarudesign.web.fc2.com/index.html>) を参考にして、フォントなど変更してみましたがいかがでしょうか。みなさまに役立つ、かつ楽しんでもらえるようなニュースレターを目指していきたいと思っております。よろしく願いいたします。

(ニュースレター幹事 堤千絵)

植物研究会・同好会紹介

「帰化植物メーリングリスト」

森田 弘彦（元 ML 管理者：秋田県立大学）・伏見 昭秀（現 ML 管理者：農業・食品産業総合研究機構近畿中国四国農業研究センター）

「帰化植物メーリングリスト (naturplant@ml.affrc.go.jp)」(以下、帰化植物 ML と略称) は、農業、都市生活や景観に大きな影響を与えている帰化植物の、全国的でリアルタイムな情報交換を目的に、2002 年 1 月に農林水産技術会議事務局農林水産研究センターのサーバ上に開設されました。当初は森田弘彦(当時、九州沖繩農業研究センター)が ML 管理者を務めました。転出により伏見昭秀が ML 管理者を引き継いで現在に至っています。

農業生産への帰化植物の影響に関する試験研究をベースに、2001 年に『日本帰化植物写真図鑑』(清水矩宏・森田弘彦・廣田伸七、全国農村教育協会 2001) が刊行され、出版社の全国農村教育協会は同書の購入者からの読者カードをもとに「帰化植物友の会」を組織しました。これとは別に、「友の会」の入会申込み用紙に電子メール・アドレス記入された方を主な対象とし、近畿植物同好会の水田光雄氏や植村修二氏の賛同を得て、帰化植物 ML がスタートしました。雑草科学、植物分類学、植物生態学などの専門研究者・学生、植生調査や緑化にかかわる環境産業の研究者・従事者、学校の教員、植物愛好家など、きわめて多様な 654 人のメンバーが参加しています。帰化植物の地域での状況、防除、利用、質疑応答、催し物、出版情報などに関する投稿記事数は 5900 に達しています(メンバー数、記事数は 2014 年 12 月末現在)。

電子メールでの情報交換に加えて、これまでに神戸市や東京都で帰化植物観察会を行ないました。また、『日本帰化植物写真図鑑 第 2 巻』(植村修二ほか、全国農村教育協会 2010) は帰化植物 ML に集積された情報の上に編集されたものです。このほか、『改訂増補 帰化植物便覧』(太刀掛優・中村慎吾、比婆科学教育振興会 2007) では投稿記事が抄録、収録され、また、「日本の植物保全 生物多様性 JAPAN 2012」の「目標 10」では、「... 帰化植物メーリングリストでは、これらの刊行物にも掲載されていない「見たことのない植物」に関する疑問や見解がやりとりされている。」と紹介されました。

PC ウィルスに侵入されたこともあり、画像などファイルの添付を禁止していますが、この点は各自の HP などの活用で補っています。帰化植物に興味をお持ちの方々の参加を歓迎いたします。

入会方法

①メール・アドレスの@以下が affrc.go.jp 以外の方

< <https://collab.sys.affrc.go.jp> >の左側メニュー「利用者情報 新規登録申請」へ進み、パスワードを設定後、「メーリングリスト参加申請」へ進み、参加可能メーリングリスト一覧から「naturplant」を探してください。基本的に画面の指示に従ってくだされば登録できます。

②メール・アドレスの@以下が affrc.go.jp の方

①の「メーリングリスト参加申請」から操作して下さい。

③管理者への直接申し込みを希望する方

帰化植物 ML 管理者アドレス naturplant-admin@affrc.go.jp まで、「登録希望の電子メール・アドレス」、「氏名」、「所属」を記入したメールを送信して下さい。



東京都木場公園帰化植物見本園での観察会 (2003 年 8 月)

